



1



2

Alternative Humanities ～新たなる精神のかたち： ヤン・ファールブル×舟越桂

2010.4.29-8.31

ルーヴル美術館と当館の2館のキュレーター
の共同キュレーションによるこの展覧会は2つ
の位相から成る。ひとつは「現代美術家の2人
展」として、ベルギーのヤン・ファールブル（1958
年生まれ）と日本の舟越桂（1951年生まれ）とい
う2人の現役作家をルーヴル美術館と金沢21
世紀美術館という2館のキュレーターがそれぞ
れキュレーションする位相。もうひとつはヨー
ロッパとアジア、ベルギーと日本という地理的、
歴史的、文化的な差異を見据えながら、過去か
ら連続する現在を生きる人間に共通する問題を
「テーマ展」として問いかける位相である。総
点数196点に及ぶこの大規模な2人展の企画
の主体は当館である。

ヨーロッパとアジアの2つの小さな国にそれ
ぞれ深く根を張る2人の世界を並存させ多次
元の対話を誘発させる趣向を凝らし、我々は彼

らの表現の奥深くに踏み入り、その尖鋭性と根
源性を露わにすることを試みた。ファールブルの
作品世界はゲスト・キュレーターのマリー＝ロー
ル・ペルナダック氏（ルーヴル美術館現代美術担
当キュレーター）が、そして舟越の作品世界は当
館の村田大輔学芸員が担当。さらに高階秀爾
氏（美術史学者、大原美術館長）と古田亮氏（東
京芸術大学 大学美術館准教授）を企画アドバイ
ザーとして招き、壮大な美術史の流れのなかで
2人の現代美術家の営為を総合的に検証し、一
つのテーマ展として編集した。

結果として、ファールブルの作品48点と合わせ
て、ファールブル自身のルーツであるベルギーで
生まれた15-17世紀のフランドル絵画よりキリ
ストの受難や聖母子を描いた宗教画など9点
が展示され、内1点のルーヴル美術館所蔵の
肖像画はファールブルの自刻像との過激なコラ

ポレーションに供された。一方、舟越の彫刻、
デッサンなど121点とともに、日本が西洋近代
主義を受容する幕末明治に登場する2人の鬼
才、河鍋暁斎と狩野芳崖による観音図など12
点、また実父、舟越保武による聖人像のデッサ
ン6点も出品された。暁斎の名作《釈迦如来図》
がフランス国立ギメ東洋美術館から里帰りし、
また芳崖の《悲母観音像》を元に1895年の第4
回内国勸業博覧会に出品された《悲母観音図
織額》とその織下絵が、初めて並べて展示され
る場となったことは特筆すべき出来事である。

「革命家としてのキリストを私は信じる」と明
言するファールブルの態度は一貫している。芸
術は革命であり、ファールブルは芸術家として革
命家のキリストに自身を重ね合わせる。無数
のスカラペで築かれた《昇りゆく天使たちの
壁》、無数の鳥の羽根で象られたフクロウが並



3



4

ぶ《死の使者の首》、人間や動物の夥しい骨片で象った《男と女の来るべき慈悲の心臓》、キリストの腕や脚を象徴する《ウンブラクルム》など、そこには肉、血、体液、骨、昆虫、鳥、動物といった生体にまつわる有機物に現代の神性が再発見され、飛翔のイメージが発現する。

一方、幼児洗礼を受け、今もキリスト教徒である舟越は「世界中の誰も見たことのないものに対して、誰もが似たような感覚を持っていて、皆それぞれ名前を付けたような気がする」と言う。気になるものをアトリエのそこそこに散りばめながら、クスノキに向き合って長い対話を重ねるうちに彼のなかでイメージや言葉が醸成する。《水に映る月蝕》をはじめ裸婦像の肩から生えたような手は、「自分の手であるかのようで、そうではない。上方からの手でもあるような、そのいずれでもあり得る存在」として発生した。さらに近年のスフィンクスのイメージはより一層明瞭に「人間のなかに存在する神性を感じながら」生み出された。舟越の手に成るあらゆる人間像に飛翔のイメージを見出すことができる所以である。

とりわけ当館中央に位置する円形ギャラリー14の展示は、本企画のコンセプトを象徴する。空間の中心部分ではファーブルの《ブリュージュ3004(骨の天使)》と舟越の《水に映

る月蝕》が対峙し、15-17世紀ベルギーに生まれたフランドル絵画よりキリストの受難と聖母、聖家族の図像、そして西洋近代の受容に揺れる幕末明治の日本に登場する釈迦如来図や観音図がその周囲を取り巻く。自身の血や体液によるドーイング、骨片を繋いで象った腕と脚、ブロンズ製のオウム等によって、ファーブルはアーティストとしての自身と革命家としてのイエスの密接な関係を独自のイコノロジーで綴った。他方、舟越自身の身体を型どりした石膏のボディ、マリア像の足の試作、未完の裸婦デッサン、極めて小品の女性の頭部とトルソー等、舟越が長年アトリエに潜ませてきた秘蔵の作品が、近代日本の心象を表す釈迦や観音のイメージと並んで姿を現し、累々たる舟越の思索を物語った。

ファーブルと舟越の飛翔する人間像とともにフランドルと日本の歴史的図像が一堂に集う時空と化した本展は、地理的、歴史的、文化的な差異を超えて、過去から連続する時間を共に生きる生き物としての人間性を問うものであった。

(不動美里)

1. 展示室11 舟越桂 彫刻作品
手前の作品：《私の中の緑の湖》2008年
2. 展示室4 ヤン・ファーブル《聖母ノ戦士》2004年
3. 当館中央に位置する円形ギャラリーでは、古今東西のイコノに囲まれてファーブルの《ブリュージュ 3004(骨の天使)》と舟越の《水に映る月蝕》が対峙する。
展示室14
左 舟越桂《水に映る月蝕》2003年
右 ヤン・ファーブル《ブリュージュ 3004(骨の天使)》2002年
4. ヤン・ファーブル
《私自身^{から}が空になる(ドワーフ)》2007年
H165 x W56 x D50 cm
AD Gallery
絵画：ロヒール・ファン・デル・ウェイデン
(c.1399-1464年)の原画に基づく
《ブルゴーニュ公、フィリップ善良公(1396-1467年)の肖像》
16世紀 [c.1530-1540年]
H34 x W25 cm
ルーヴル美術館絵画部門、M1818
1856年 シャルル・ソヴァージュ氏寄贈